



Title	太宰治の詩（ポエジー）
Author(s)	野口, 尚志
Citation	太宰治スタディーズ. 2023, 7, p. 4-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/92821
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

太宰治の作家活動開始期である一九二〇年代半ばから三〇年代初頭は、東京帝国大学の辰野隆をはじめ、鈴木信太郎や佐藤正彰、中島健蔵らが積極的にフランス象徴主義の詩や詩人の紹介・研究・翻訳を行っていた時期でもある。辰野を代表に東京帝国大学フランス文学研究室が編集した「仏蘭西文学研究」（一九二六（三〇）や、日本における新詩運動（エスプリ・ヌーボー）を牽引した雑誌「詩と詩論」（一九二八（三三）、途中「文学」と改題）からも多くを直接・間接に摂取したのは、同時代の横光利一や小林秀雄らだけではない。太宰も同様であったはずである。

太宰は「東京八景」（「文学界」一九四一・一）で「辰野隆先生を、ぼんやり畏敬してゐた」と記し、その著書『ポオドレル研究序説 詩人の態度』（一九二九・一二、第一書房）からは、「スタイル」を学んだと述べている（「作者の言分（その二）」、「時事新報」一九三五・一二・四）。また、「盗賊」（「帝国大学新聞」一九三五・一〇・七）には辰野が「日本一のフランス文学者」として登場し、その「弟子」で「日本一の詩人」と呼ばれている三好達治は、『詩と詩論』の関連企画「現代の芸術と批評叢書」の一冊として出たポードレルの散文詩集『巴里の憂鬱』（一九二九・一二、厚生閣書店）の翻訳者でもある。そこに序言として収録されている「アルセーヌ・ウーセイに与ふ」で述べられた散文詩の試みが、『晩年』の作品の一部を想起させるのは決して偶然ではあるまい。

もし人あつてこれを目して首尾の備わらざるものとするならば、それは正しくないであらう。何となればここでは総てが反対に、同時にかはるがはる、相互に首であり尾であるのだから。（中略）先づ脊椎骨を抜き去れ。その時この紆余ある幻想の首尾は、再びたやすく形を整へるであらう。また、それを多くの断片に裁ち切れ。その時それらの各々は、別々に離れて存在しうることを示すであらう。

『晩年』作品の特徴を「意図された「竜頭蛇尾」、仕組まれた「未完」と呼んだのは東郷克美だが（『太宰治という物語』二〇〇一・三、筑摩書房）、中村三春も小説そのものを問い直す「細部の独立」「断片性の強調」という方法論に注目している（『小説的アヴァンギャルドの帰趨』、「横光利一研究15」二〇一七・三）。

「葉」や「玩具」等に顕著なこの形式が、続く「虚構の春」や「二十世紀旗手」「HUMAN LOST」等でもとられているのは明らかだろう。「彼は昔の彼ならず」や中期の「富嶽百景」などは一見してこうした形式とは無

イントロダクション

—— 太宰治の詩（ポエジー）

野 口 尚 志

縁のようだが、前者は人物の、後者は富士山の多様なイメージのスナップショット集（これ自体も断片の集積である）であり、いずれも断片的な挿話を配列する方法で書かれていることがわかるはずだ。

太宰治はジャンルとしての詩を多く書いたわけではないが、おそらくこうした象徴主義の方法論を根拠に、小説に詩的な方法を大胆に取り入れた作家である。その顕著な成果は主に前期にみられるが、詩的な方法は潜在化してその後も作品に活かされていると考えられる。ボードレールの言うように、そうした「断片」は「別々に離れて存在しうる」言葉として独立し、読者の想像力と融合して一つの世界を形成したはずである。それはより純度の高い嘘（フィクション）として、作品世界を自立させることにもつながっていったように思われる。

この特集は、そうした太宰の詩への志向、詩精神との共鳴からなる作品群の中に、ジャンルとしての詩がどのように取り入れられているかを探るための端緒を提供しようとするものである。詩（ポエジー）とプロット上に表現される小説とは、ある面で非常に相性の悪いものでもある。この点を初期に十分に知悉したはずの太宰の作品に登場する詩歌は、どのように配置され、どのような効果を上げているのだろうか。また、昭和初年代のモダニズムに触れた太宰の目には、それ自体象徴主義的ともいえる方法で創作されている短歌や俳句、あるいは漢詩などの古来の詩歌はどのように映っていたのだろうか。一方で、流行歌の歌詞はそれらに対してどのような位置にあるのだろうか。

この特集を契機に、太宰の詩人としての面と、その詩人が選んだ詩と、その双方を考えるための議論がさらなる展開をみせていくことを期待したい。